

露伴全集

第二十九卷

昭和二十九年十一月二十七日印刷
昭和二十九年十二月四日發行

露伴全集第二十九卷

頒價七百五十圓

著作權者

幸田

田

文

編纂

蝸牛

牛

會

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田一雄

印刷所

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
精興社

發行所

株式會社

岩波書店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)八四八六番
振替口座東京二六二四〇番

目次

偶得二則

明治二十二年十月

面白き言

明治二十三年九月

本箱退治

明治二十四年三月

紅葉山人の新婚を聞きて

明治二十四年三月

漫言一則

明治二十四年八月

すきなこと

明治二十四年十二月

一日無事

明治二十五年三月

夫婦茶碗の本家

明治二十五年四月

地口行燈

明治二十六年八月

一

三

九

二〇

二一

二二

二四

二七

二九

明暗ふたおもて 明治二十八年一月

東國の某に與ふるの書 明治二十八年二月

西國の某に答ふるの書 明治二十九年一月

夏夜問答 明治二十九年八月

戲 明治二十九年十一月

忍月居士の俳句 明治三十年二月

蝦蟆通 明治三十年二月

其角と日蓮と 明治三十年二月

まふくだの句 明治三十年二月

時雨 明治三十年三月

得知子の俳句 明治三十年三月

三三

四〇

四六

四九

五五

五七

五九

六一

六二

六六

六七

好色之歌 明治三十年七月

六八

すゞみ臺 明治三十年九月

七〇

家屋 明治三十年十月

八二

家の内 明治三十年十二月

九五

ぬき孔 明治三十年十二月

一一〇

歌によまれたる雪 明治三十一年一月

一一一

女の上 明治三十一年二月

一一四

花のいろく 明治三十一年三月

一二二

書生 明治三十一年七月

一四八

旅の心得 明治三十一年七月

一五一

火桶 明治三十二年一月

一五八

相合炬燵

明治三十二年三月

一六一

古の淺草

明治三十二年四月

一六五

春の墨堤

明治三十二年四月

一六八

世に忘れられたる草木

明治三十二年十一月

一七〇

眼の讚

明治三十三年一月

一七三

色

明治三十三年二月

一七六

釣魚談一則

明治三十三年三月

一八五

字義數則

明治三十三年六月

一九四

少年時代

明治三十三年十月

一九七

宴會

明治三十三年十一月

二〇九

朗月亭羅文

明治三十三年十二月

二一八

雲のいろく 明治三十五年八月

二二一

人の言 明治三十六年三月

二三四

瑣言 明治三十六年四月

○西鶴の花押

二六三

○西鶴の書牀

二六四

○西鶴の前句付選評

二六五

○ふたゝび鶴翁の花押に就て

二七六

○珍癡奇算法

二七七

○三たび鶴翁の花押に就きて

二八〇

○櫻陰比事

二八一

○ふたゝび櫻陰比事につきて

二八五

○西遊記の著者

二八七

○京傳の廣告

二八九

○北齋の手簡	二九七
○をかしき句	三〇六
○湯錢	三〇七
○渡し錢	三〇七
○灸	三〇七
○年寄曾我	三〇八
○めくり	三〇八
○三馬と京傳と	三〇八
○村田屋のおくま。穴のいなり	三〇九
○一九ののんき	三〇九
○前生	三一〇
○青本の末路	三一〇
○似字盡	三一〇
○眞顔	三一〇

○俳諧節用抄	三一
○京傳閉口	三二
○娼夫張酷貧	三二
○馬琴と黄金の釜と	三九
○馬琴の述懷	三〇
○京傳の紋	三一
○京傳自ら嘲る	三一
○古作者の飄逸	三二
○一九齋	三二
○臭草紙の畫と文と	三三
○通笑	三三
○通笑の姓名	三四
○一九ののんき	三四
○丈阿	三五

○晋子と動物

三二五

閑話

明治三十六年五月

○追蠅拂

三三二

○慶長版七書

三三三

○黑韃事略

三三五

○詠歌本紀

三三五

○平山行藏の著述

三三七

○浮世風呂以前の浴室に關する書

三三九

○兼好法師

三四〇

○闇のあかり

三四一

○驚くべき書

三四一

○須彌山說に關する書

三四二

○肝膽鏡

三四七

○紹巴と三甫と

三四七

○乾山

三四九

○風來山人

三五〇

○二宮尊徳

三五〇

○續文獻通考

三五三

○荀子抱朴子

三五四

驚待庵物語

明治三十八年一月

三五五

新小説に就ての予の感

明治三十八年一月

三六五

天明の紳士

明治三十八年

三七八

綠蔭茗話

明治三十八年八月

三八三

旅行の今昔

明治三十九年八月

三八七

學生時代

明治三十九年九月

三九一

爪 明治三十九年十一月

七草 明治四十年一月

雲の影 明治四十年四月

花鳥 明治四十年四月

ひとり言 明治四十年十一月

甘味の過現來 明治四十一年三月

三端 明治四十一年四月

雲雀 明治四十二年三月

言語躰の文章と浮雲 明治四十二年八月

鉤の談 明治四十二年九月

釣談 明治四十二年九月

三九六

三九八

四〇〇

四一三

四一六

四三二

四三八

四四三

四四七

四五〇

四七二

釣車考

明治四十二年

四七五

午前の日記

明治四十二年十月

四九〇

原田直次郎君

明治四十三年一月

四九一

栗子の喩

明治四十三年

四九四

談水

四九七

水の東京

明治三十五年二月

四九八

夜の隅田川

明治三十五年九月

五二一

游漁の説

明治三十九年十二月

五二五

漂流の談

明治四十四年七月

五三一

鱸

明治四十四年八月

五三五

千蔭が浪を觀てよめる歌

明治四十四年十月

五四一

安積良齋の海を觀るの記

明治四十四年十一月

五四四

江戸時代の釣

明治四十四年四月

五四八

紋の事

明治四十四年十月

五五三

三馬の浮世風呂

明治四十五年二月

五七一

後記

五七三

偶得二則

漁村に在る數日、晝は磯の香のする漁夫の家に訪ひ入り老翁少女と語る、或は粗傲慥悍愛すべきを見る、或は寒酸赤貧悲むべきを見る、女子に色作るものなく閭里に絃を彈するものなし、蘆畔得々として此中に彷徨し、鯛を淺間山の下に釣り詩を浮島の岩頭に吟ず、時に長風髮を梳つて鏡を要せず、急灘血を奪つて朱唇褪めたる裸躰の銅像の如き蛋と手を携へて行く、甚だ趣味あり所得あり。夜は荒屋に燈を剪つて一二の書を読む、意殊に暢然たり、爰に於て初めて悟るくされ玉子の味。

曾て都門の中に在りてくされ玉子を読むに面白からぬ事非常なり。人に逢ば即ち必らず其篇を罵り、明治第一の惡文章となす。今は即ち此篇を愛讀して明治第一の好文字となす。蓋し人情皆然らん乎。若夫れ世塵紛々たる所に在て讀まば厭ふべく嫌ふべき所以あり、若夫れ滿目蕭條たる山水の間にありて之を讀めば、山水一段の清氣を發して人の眉目に迫るを覺ふ、村夫村婦一段の韵致を増して人の胸臆を洗はんとする如し。嗚呼くされ玉子を懷中して人若し旅行せば必らず然らん、然らば即ち此文章は朱引外の絶妙文字なり。我自ら此文章を讀むべきの所を覺る、樂んで後人に示す、知らず後人見て

以て何となすを。

愼鸞交傳奇も亦然り。殊に此曲湊合奇巧にして然らざるべからざるの因縁中に作者の結構布置を寓し、一點の無理なく萬世の情話を盡す。僻郷閑居して深夜閑し了り寂然と瞑目すれば、世事歴々と掌中の荳蔴羅菓を觀るに似たり。是れ此曲細微にして世間を寫し出せるの微且つ眞なるにあらず、此曲は是れ透明の水晶鏡にして、此中より世間の大小是非看到り得ざるものなし。悲かなしい夫明治の文章家顯微鏡を作りて望遠鏡を作らず、寫眞畫に巧にして浮彫を爲さず、我リヤルを尙ぶを悦んでアイデヤルを排斥するの傾かたむきあるを忌む。支那西洋の文化奉崇する所素より異なるべし、而して文の妙處に到れば未だ大に異なるを見ず。庵遇の一節、鄧蕙娟の痴、王又嬌の高、共に絶奇にして至眞なり。讀了りて涙を禁じ得ず。噫笠翁は眞才子なる哉、此人の書を読むに僻郷寂寞を感じず。

嵯峨の屋氏によりて山水の美を知り、李翁によりて靜中群妙を觀る、是を閑中の偶得とす。

(明治二十二年十月)